

特別支援学級での外国語活動における留意点と 教員支援に関する基礎調査

愛媛大学 教育・学生支援機構 英語教育センター
(学校心理士、愛媛支部所属)

中山 晃



背景

- 2011年度～ 外国語(英語)活動の必修化
- 特別支援学級での実践 → 認知度(低)
- 指導方法 → 各校に一任
- 指導案 → 実践報告や公開研究授業(少)



先行事例

- 星居優子(2008)『特別支援学級における英語活動』第8回 小学校英語教育学会要綱 p. 31. (春日部市立粕壁小学校での事例: 情緒・知的合同学級におけるロングでの実践, 同年11月に公開授業を実施)
- 久保稔(2009)『特別支援学級における英語活動(アクティビティー案)』第3回AEEN Workshop. (旭川市立緑が丘小学校での事例: 情緒学級におけるロングでの実践)
- 塚田初美(2009)『特別支援と外国語活動:授業に生かす外国語活動』第3回 Let's Enjoy English. 全体ワークショップ資料. (旭川市立愛宕小学校での事例: 知的障害学級におけるロングでの実践)
- 小林省三・渡邊寛治(2010)『実践研究:知的障害児の「生きる力」を育む英語活動の研究』第10回 小学校英語教育学会要綱 p. 39. (江戸川区立二之江小学校での事例: 知的障害学級におけるロングで, 長期にわたり行われた実践の記録)
- 中川麻衣子(2010)『特別支援の子供たちが英語でコミュニケーション』北海道経済 8月号 p.208-210. (旭川市立永山南小学校での実践: 情緒障害学級におけるロングでの実践)



特別支援学級で英語活動？

- 「生きる力に繋がる国際コミュニケーション力の素地を育む」(小林・渡邊, 2010)

という大きな目標もあるかもしれないが,

- 情緒や身体解放, 非言語コミュニケーション(ジェスチャーなど)の素地育成, SSTを導入したコミュニケーション力の向上を目指す(久保, 2009; 塚田, 2009)
- (外国語活動と同様に,)「英語の習得」が第一目的ではない。



実践の際の留意点1^[1]

- 机上での文字と言葉だけによる学習
 - 負担
 - 情緒や身体解放へ(語学→体育)

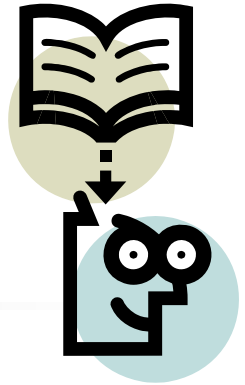
- 具体物と半具体物
 - 果物や動物の絵、ぬいぐるみ
 - ブロック(いす)、タイル



実践の際の留意点2 [1]

- 姿勢・運動・視線などの制御機能への支援
 - そわそわ, きよろきよろ
- 目と手の共同作業
 - 絵から何かを探す
 - 大小の○を描く
 - 線をひく





実践の際の留意点3 [1]

- ワーキングメモリ
 - 「頭の中の黒板」よりも・・・
- 確認できるものを
 - 手順表などの補助教具
 - いつも同じ場所に「流れ」を示す

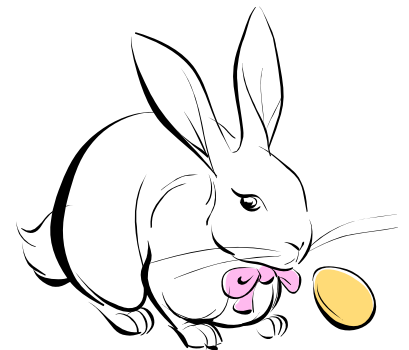




実践の際の留意点4 [1]

- 絵や図でイメージを補足
 - 問題場面がイメージできない

- イメージ化
 - 挿絵を実物投影機で映す
 - 問題文をシンプルに
 - モデル(手本)明確に





方法

- 特別支援学級での英語活動担当者
(4名:補助教員も含む)を対象
- アンケート調査
- インタビュー



特別支援学級で英語活動を行うにあたっての留意点

- 個々の児童の特性に合わせた声かけ, 指導(情緒の解放や体を動かす活動, SSTの導入など)を心がけている。(特性理解)
→ 英語の習得を目指しているのではない
- 普段から信頼関係(児童・担任とも)を築く努力をし, 英語活動に対して児童が大きな不安を感じないように配慮している。例えば, ゲームなどで勝つことへのこだわりや負けることを回避できるようにしている。(配慮)
- 活動を単純化し, 視覚に訴える教材・教具の工夫とリズム感のある授業を展開するようにしている。(工夫)



特別支援学級で英語活動を行うにあたっての不安

- 年齢も、障害も異なる児童たちに対して、どのように接してよいのか分からなく不安を感じた。（接し方：必ずしも特別支援が専門の先生が担任になるわけではない）
- ことばをあまり発しない子やクラスから出て行ってしまう子、途中で泣き出す子、活動に参加しない子など、様々な特性を持つ児童たちとの英語活動は通常学級とは違う難しさを感じた。（接し方）
- 実践例や特別支援における英語活動の専門文献がなく、何をどのように行うことがベストなのか全くわからないこと。（専門知識）
- （反対意見）長い時間を要する子もいるが、英語活動を体全体で楽しみ、興味関心を持って意欲的に参加する児童の姿と成長をみると安心する。
- （反対意見）活発な様子を見ている限りにおいては、全く問題ない。周りに不安になっている人たちがいるので、勉強してみたい。



特別支援学級で英語活動を行うにあたっての要望

- 特別支援学級のみで英語活動を行うにしても、通常学級（親学級）に戻って行うにしても、人的支援が必要になると思われる。特に、英語活動中に様々な行動をとる可能性が高いので、一人ひとりの実態をよく知るものがサポートに入る必要がある。また、担任教員は英語活動に対して、通常学級担任以上に不安を感じているように思われる。英語活動をアドバイスするなど、一緒に指導できる人材が必要と思われる。（人材）
- 特別な支援を必要とする児童に対しての英語活動の指導法や考え方を各学校に文科省から示してもらいたい。各学校に一任ではとても厳しい面があるので、研修などで担任の不安を取り除く必要があると思う。また、親への理解をどのようにするかも課題になると思われる。（研修）



英語活動中の様子

- 「Hello!」や「Good morning!」などの発話に対して、個人差はあるが、驚いたり、すぐにオウム返しをしたり、何か違うなという表情を見せたり、様々な反応を見せてくれる。子供によっては、その日のうちに、私(担当者)を見ると習った英語を使って声をかけてくれる子もいる。
- 文字も見せるようにしているが、特に興味は示していない様子だった。





特別支援学級だからその様子

- 他の教科では見られない反応として、積極的に授業に参加しているように思える。活動内容の単純さやリズム感のおかげかも知れない。
- プラスになっているようだ。立ったり、歌ったり、あるいは、集団でのゲームを通して協調性を身につけているように見える。普段は個々の特性に合わせた個別プログラム(支援計画)に合わせて学んでいるが、英語活動はみんな一緒にやっているからかも知れない。
- 他の教科と異なり、スタートラインが一緒なので、比較的自信を持ってやっている。



特別支援学級の担任及び児童生徒の保護者との関係

- 信頼関係が出来ていない場合は、連携が難しいこともある。
- 英語活動に不安や疑念を抱えている方もいる。英語活動以外の授業の指導計画(個別)などもあるのに、時間が足りないなどの不満などもあるようだし、公開授業をすることには抵抗があった。
- 特に反対している方はいないようだが、保護者の方は、子供の障がいのせいで、すべての面に対してマイナスに考えることがある。(例:「うちの子に英語なんて・・・、無理です。」など)。
- 情緒障害の子達と一緒にだと、うちの子(知的障害)には、おとなしすぎるので、不安だし、どうなのでしょう?という質問を受けた。
- スーパーなどで、バナナを見たときに「バナーナ(英語発音)」と楽しそうに言っているのをみてうれしかったという良いフィードバックをもらった。



活動中の工夫

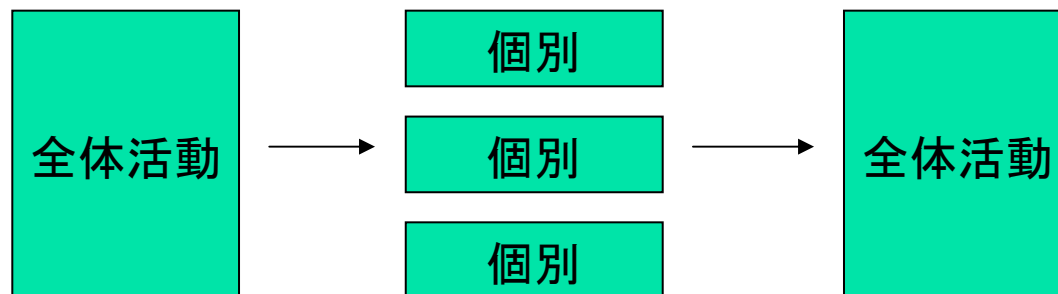
- 比較的に大きな名札をつけてあげた(形や色, 好みにも留意).
- 色つきのやわらかいブロックをイスにした(このイスを先生が用意すると英語活動が始まると思い, みんなわくわくし始める. また一人ひとりお気に入りのものを選ぶのでそれに座ると英語活動中安心して参加している.)
- 英語活動のパターンを作った. 英語活動が始まる前には英語の歌を流したり, 先生を呼びに行ったり, あるいは終わりの歌などを決めておいたりした. 「始まり」→「活動」→「終わり」のパターンをはっきりさせておくと, 次にすることが明確になるので比較的混乱しない. (興奮する子も多いのでクールダウンを行う必要もある.)
- (現状においては)特別支援学級のみで英語活動を行う場合は, ネイティブの先生には入ってもらっていない. 親学級に入って活動するときは(ネイティブの先生に)接することもある.
- 通常学級にいる子供でも, 特別支援学級に入るか入らない(かという境界)ところの児童(支援が必要な場合のある子, おそらく発達障害を抱えている児童を想定: 著者加筆)には, 特別支援学級での英語活動のやり方が合う気がした.





モデルパターンとして

- ショートタイム(10分以内): 歌・ダンス
- ロングタイム(30分～45分): ゲーム



* 支援員の数にもよるが、ロングの場合、
特性に合わせて個別活動をはさむことも有効



結 語

- 不安
- 支援(人的・研修)を要望する声
- 要望に対応してゆくことは、教員だけではなく、特別支援における児童達への支援になる
- 特性理解を踏まえた様々な工夫
- そうした実践への支援の重要性
- 英語活動の担当者の役割分担(担任, 補助教員, ネイティブ)と研修のあり方や内容についての深い議論が必要



参考文献等

平成22年度パナソニック教育財団 先導的実践研究助成

「特別支援教育での外国語活動におけるICTの活用促進を目指した参加型校内研修の企画・運営ガイドの開発」

中山晃（愛媛大学教育・学生支援機構： 全体統括）
吉田広毅（常葉学園大学外国語学部： ICT利用・助言）
小山俊英（旭川市立北光小学校： 研修会実施・助言）
清水忠明（旭川市立近文小学校： 研修会実施・助言）
塚田初美（旭川市立愛宕小学校： 特別支援全体・助言）
久保稔（中富良野町立中富良野小学校： 知的学級担当）
中川麻衣子（旭川市立永山南小学校： 知的学級担当）
松田泰生（旭川市立向陵小学校： 情緒学級担当）

総勢 8名（各分野での高い専門性と豊富な経験）



*AEEN - Asahikawa English Education Networkは、北海道旭川市周辺の小学校教員が集う英語教育研究ネットワークです。



ICTの必要性

- 個々の障がいの状態や発達に応じた**理解支援**
(視覚・聴覚、知的、肢体不自由、病弱、ASD等)
- **発表・表現支援**(上記の理解支援だけでなく)
(拡大代替コミュニケーション: AAC)
- 学外からの人的支援・ソフト開発と利用支援
(大学等の研究機関と教育現場の連携)



参考・引用文献

引用文献

- [1] 五味重栄・小林敦子. (2009). 長野県総合教育センター教職員研修講座「英語ノートはこう料理しよう」平成21年6月30日(発表)

参考資料

- 久保稔. (2009). 特別支援学級における英語活動(アクティビティー案). 第3回AEEN Workshop. 於 北海道旭川市立近文小学校
- 塚田初美. (2008). 特別支援学級と通常学級との交流で進める国際理解教育(えがおネット～タンザニア学習を窓口に～). JICA教師海外研修報告書
→ 「国」という概念をはっきり理解していない子供達もいる。
→ 現地の歌やダンス、DVD映像などに興味を持つ子も。
- 塚田初美. (2009). 特別支援と外国語活動:授業に生かす外国語活動. 第3回 Let's Enjoy English 全体ワークショップ資料.
- 星居優子(2008)『特別支援学級においての英語活動』第8回 小学校英語教育学会要綱 p. 31. (春日部市立粕壁小学校での事例: 情緒・知的合同学級におけるロングでの実践, 同年11月に公開授業を実施)
- 小林省三・渡邊寛治(2010)『実践研究:知的障害児の「生きる力」を育む英語活動の研究』第10回 小学校英語教育学会要綱 p. 39. (江戸川区立二之江小学校での事例: 知的障害学級におけるロングで, 長期にわたり行われた実践の記録)

